札幌国際大学紀要，53：77-93，2022

〈論　文〉

「共感」という語の起源と歴史について

岡　田　顕　宏
札幌国際大学人文学部心理学科

The origin and history of the word "*kyo-kan*" as a Japanese translation of "*empathy*"

Akihiro Okada（Department of Psychology，Faculty of Humanities，Sapporo International University）

In this paper, the origin and history of the word "*kyo-kan*" were explored as a literature review. Japanese word "*Kyo-kan*" was coined as a translation for the English word "*sympathy*" in the late 19th century. After a couple of decades during which the word had been unused except in the limited field of philosophy or aesthetics, its use as an everyday-language began to spread in the mid-1930s and later. Since early 1950s, when Imura (1952) used the term for describing the way of understanding the other person in psychotherapy, "*kyok-kan*" has been used by Japanese psychotherapists (e.g., Kuromau, 1956; Saji, 1955). In the almost same period, when the concept of "empathic understanding (Rogers, 1957)" was introduced into Japan, the word was used as a translation of the word "*empathy*" and later its use has become popular, though the word "*kanjo-inyu*," a direct-translation of the German word "*Einfühlung*" which is an origin of the word "*empathy*," was also suggested by a number of psychologists.

キーワード：共感　同情　感情移入
Keywords：Empathy　Sympathy　Einfühlung

問題

「共感」という概念は、心理学および臨床心理学において中核的な概念の一つであるだけでなく、組織運営やマーケティングを含め、人と人とが関わる分野において極めて重要な概念である。この概念には、相手の心（感情や思考などの内的状態）を理解すること（認知的共感）や、相手と考えや感情を共有すること（感情的共感）、さらに相手を思いやる気持ちをもつこと（共感的配慮）、などの意味が含まれているが、これらは必ずしも同じ心の状態を指すわけではないことに注意する必要がある。共感という概念は重要であると同時に多義的であり、文脈によっては、その概念を詳細に整理する必要がある。現在では、共感は英語の"empathy"とほぼ同義で使われており、類似した概念である"sympathy"と区別され、"empathy"＝「共感」、"sympathy"＝「同情」という使われ方が一般的になりつつある（ブレイディ，2021）。

しかしながら、ブレイディみかこが著書『他者の靴を履く（2021）』の中で指摘しているように、「共感」という語は"sympathy"の訳語として使われることも少なくない（e.g., ヒューム，大槻訳，1951；ミード，山本訳，2021；スミス，高訳，2013；スペンサー，森村訳，2017）。実際には、分野や時代によって「共感」の使われ方は異なっており、一部の辞書だけを参照してしまうと、心理学の「共感」の語源は"empathy"なのに、日常語の「共感」の語源は"sympathy"だから別の概念なのだ、などという誤った理解にも陥りかねない。

そもそも「共感」という語は、いつから存在し、どのような経緯で"empathy"の訳語として定着することになったのだろうか。本稿では、文献調査を通して日本語の「共感」という語の起源を探索するとともに、この語が英語の"empathy"の訳語として定着するに至った経緯について検討したい。

"Empathy"の起源と歴史について

「共感」の語の起源を探索する前に、現在、この語に対応する英単語"empathy"の起源と経緯について簡単に記しておきたい。一般的には、英語の"empathy"は、1909年に心理学者の Edward Titchener がドイツ語の"Einfühlung"の訳語として造り出したのが最初[1]とされる（Wispé, 1987）。本節では、"empathy"の経緯について議論するために、まず、この語と密接に関連している英語の"sympathy"とドイツ語の"Einfühlung"についても触れておきたい。

英語"Sympathy"について

英語の"sympathy"という語は、ギリシャ語の"συμπάθεια（シンパテイア）"に由来する語であり、この語は16世紀末のシェイクスピアの作品「ロミオとジュリエット」の中でも使われているような比較的古い英語である。それ

が、18 世紀になり、デイヴィッド・ヒューム（Hume, 1739）やアダム・スミス（Smith, 1759）によって人間の社会性や道徳感情にとって重要な心の働きとして取り上げられるようになり、それが、19 世紀のダーウィン（Darwin, 1872）やスペンサー（Spencer, 1870）の適応に関する議論を経て、ミード（Mead, 1934）[2] やマクドゥーガル（McDougall, 1908/1936）など 20 世紀初頭までの心理学の分野では非常に重要な概念となっていた。

ドイツ語“Einfühlung”としての empathy

英語“empathy”の語源であるドイツ語の“Einfühlung”は、Robert Vischer が美学用語として創出した語とされており、それを Theodor Lipps が「心理学原論（Lipps, 1903a）」の中で、知覚や対人理解のための重要な心理学的な働きを説明するために用いたことから、心理学用語として定着することになった語である（Jahoda, 2005; Wispé, 1987）。リップスによる“Einfühlung”は、20 世紀初頭に日本に輸入され、1911 年には「感情移入」の訳語とともに、リップスの理論として紹介されている（深田, 1913）。

Lipps 自身は、“Einfühlung”に対応する唯一の別の単語が“Sympathie”（英語の sympathy に相当）であろう[3] と述べており（Jahoda, 2005, pp.157-158）、実際に英語圏では“sympathy”という訳語も使われていたようである。しかしながら、Edward Titchener は、この新しい概念に対して、“empathy”という新しい用語を造り出したのである。Titchener は、当時新しかった心理学という学問を物理学や化学と並ぶような自然科学の一分野にする必要があると考えており、日常語として使われる“sympathy”ではなく、ラテン語やギリシャ語に由来する専門用語を造り出したかったようである（Titchener, 1895; Lanzoni, 2017, p.57）。そして、古代ギリシャ語に精通している Titchener が、“sympathy”という既存の語とのアナロジーから（Titchener, 1924, p.417）、ギリシャ語の“εμπάθεια（エンパテイア）”に由来する英語を造り出したということである[4]。ただし、この「エンパテイア」という語は接頭辞「エン（εμ-）」と「パトス（πάθος）」からなる語で、強い感情状態になるということを意味し、Lipps が使っていたような「感情移入」に相当するような意味が含まれているわけではないことに注意する必要がある（さらにいえば、現代ギリシャ語のエンパテイアは、「悪意」や「敵意」など、およそ共感（empathy）とは真逆とも言えるような意味として使われている）。また、Lanzoni（2017）によると、“empathy”という訳語は当時の英語圏で必ずしも歓迎的に受け入れられていたわけではなく、元のギリシャ語とは異なる意味を持たせるような用法に対して多くの批判的な意見があり、“ecpathy”や“sembling（Baldwin, 1906）”のような別の訳語も提案されていたようである（Lanzoni, 2017）。

ここで重要なのは、Lipps の“Einfühlung”も、Titchener による造語“empathy”も、決して従来からある“sympathy”と対比させるような意図で提案された語ではないということである。つまり、現在のような“sympathy”と“empathy”を対比させるような考え方や意味は当時にはなかったということである。さらに、Titchener は、イメージを中心とした独自の研究領域の中でこの語を使っており、必ずしも Lipps の使った心理学的概念である“Einfühlung”と完全に同義であるとは言えないという点にも注意する必要がある。それでも“empathy”という英語は、少なくとも 1916 年の時点で“Einfühlung”に対応する英語として日本に導入され、「感情移入」という訳語とともに「日英獨佛心理學語彙（高島, 1916）」に掲載されている。

Titchener 以降の Empathy

20 世紀初頭以降の行動主義の台頭により、内観法を中心とした Titchener の心理学はその後広まることはなく、Titchener の心理学の用語としての“empathy”が心理学用語として普及することはなかったようである。William McDougall の『*Introduction to social psychology*（初版は 1908 年）』では、現在の“empathy”に相当する概念として“sympathy”という言葉が使われているが、第 23 版（最終版）が 1936 年に出版されているが、最終版に至っても“empathy”という語が掲載されることはなかった（McDougall, 1908/1936）。Lipps の“Einfühlung”も Titchener の“empathy”も 1920 年代頃の心理学では、あまり取り上げられることはなかったようである。また、1933 年までの『Oxford English Dictionary（Murray, et al., 1933）』には、“empathy”の記載はなく（empathy の記載が見られるのは次の 1972 年の版以降である）、この時代にはまだ日常語としても普及していなかったことが推察される。

1930 年代初頭において、“empathy”の語は、Max Scheler の 1925 年の著作『*Wesen und Formen der Sympathie*（同情の本質と諸形式）』を解説した Becker（1931）の論文の中に見られる。シェーラーのこの著作（Scheler, 1925）は、多義的な概念である“Sympathie（同情）”を“Mitgefühl（共同感情）”、“Mitfühlen（共同感得）”、“Nachfühlung（追感得）”、“Einfühlung（感情移入）”、“Einsfühlung（一体感）”、“Gefühlsansteckung（感情伝播）”など様々な概念に区別・分類して検討したものであるが、Becker（1931）は、こうしたドイツ語に対して、“empathy”の他に、“mimpathy”、“compathy”、“transpathy”、“unipathy”など、“sympathy”に関連する複数の類似した訳語を提案している。残念ながら“empathy”以外の語が普及することはなかったようであるが、“sympathy”の概念が多義的ないし多面的なものであり、それらを厳密に整理・分析しようとすると、必然的にそれら

を区別する複数の用語が必要となるということが示唆されているように思われる。

1930年代後半になると、パーソナリティ心理学に関する著作（Allport, 1937, p.531）や、投映法心理検査であるTATに関する著作（Murray, 1938, e.g., p.247）の中に“empathy”の語が登場し、1939年には『*Introduction to Psychology*（Boring, Langfeld, & Weld, 1939, pp. 273-275）』の中でも“empathy”の概念が大きく取り上げられるようになる。

Carl Rogers と Empathy について

Carl Rogersは、「共感（empathy）」という語のその後の普及に大きな影響を及ぼした人物であると考えられているが、彼の著述の中に“empathy（empathic）”の語が見られるのは1949年以降のことである（Rogers, 1949）。これは、当時“empathy”に関する先駆的な研究（Dymond, 1948, 1949）を行っていたDymondと共同研究をはじめた頃であり、「非指示的心理療法」を広めることにつながったRogersの著作“*The Clinical Treatment of the Problem Child*（Rogers, 1939）”や“*Counseling and Psychotherapy*（Rogers, 1942）”の出版よりもずっと後になってからのことである。また、Lanzoni（2017）が指摘しているように、Rogersのいくつかの論文には“empathic”とすべきところを“emphatic”とミスタイプしたまま印刷されているものも複数あり（e.g., Rogers, 1952, 1956; Rogers & Becker, 1950）、少なくともこの時代には、Rogers自身が必ずしもこの言葉に慣れておらず、また特別な思い入れがあったわけでもないことが推察される[5)]。

その後、Rogersによる「共感的理解（empathic understanding）」を取り上げた「必要十分条件」論文（Rogers, 1957）の発表された1957年を境に、“empathy”という語の使用は、学術論文の中でも急激に増えていくことになる。インターネットサイト「Science Direct」で“empathy”をキーワードに検索してヒットした各年の文献の数の推移を図1に示す。

“Empathy”の起源と歴史のまとめ

以上のように、“empathy”という語は、ドイツ語の“Einfühlung”の訳語としてEdward Titchenerによって造られたものであるが、その訳語は決して“Einfühlung”の概念を心理学に導入したLippsの意図したものではなく、また、英語圏においても当時Titchenerの用語がそのまま受け入れられた訳ではなかったようである。1930年代中盤以降に“empathy”という語が徐々に使われていくようになるが、それは、厳密な意味でLippsの用語の“Einfühlung”と同義というわけではないし、Titchenerのイメージ心理学の用語として使われたわけでもない。考えられるのは、“sympathy”という多義的な語に包含される多様な意味を区別する上で、“empathy”という新しい類語の存在は都合が良かったのかもしれない。その後、Rogersが心理療法における重要な概念の一つとして“empathic understanding”という言葉を使用し、その概念の精緻化が進んでいくのにつれて、より一般的な用語であった“sympathy”との対比が強調されていく中で、現在のような“empathy”と“sympathy”とを明確に区別するような概念化が進んでいったのだと考えられる。

日本語「共感」の起源について

それでは、日本語の「共感」という語はいつから使われているのであろうか。「共感」の語の起源について直接触れている文献は、著者の知る限りではあまり多くない（e.g., 仲島，2006；中妻・サトウ，2019；七星・川上，2016）。仲島（2006）は、「共感」という語の戦前の使用例を複数挙げながらも、この語が戦後に定着したという自説を展開しているが、この語の起源を積極的に追求しているわけではない。ただし、仲島が指摘しているように、「共感」という語は中国語に由来するものではなく、明治時代に日本で作られた言葉のようである（それに対して「同情」の語は中国の故事にも見られる語である）。

朱（2002）は、明治期の近代哲学用語について、その成立過程の文献調査を行っているが、その調査の対象語

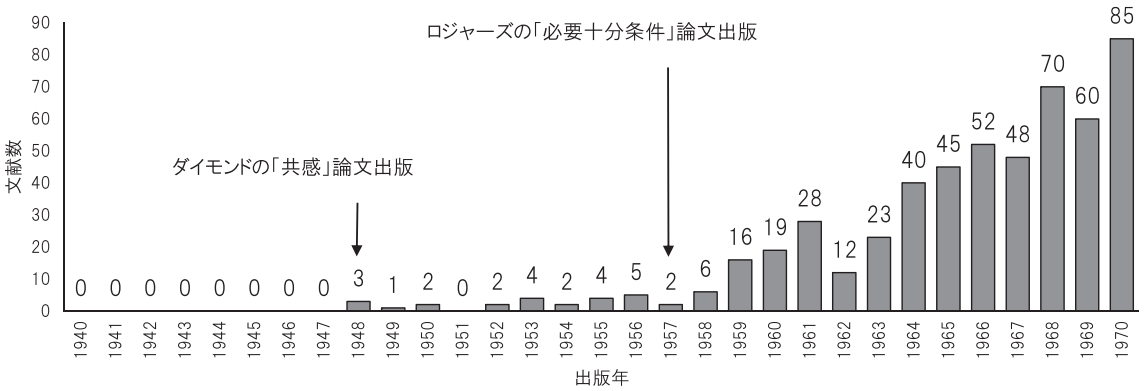

図1.「Science Direct」に掲載されている「empathy」の語を含む文献数の推移.

表 1　「教育・心理・論理述語詳解（普及舎、1885）」が参照した書籍のリスト

出版年	書名（訳者・編者）および原書	「sympathy」の訳語（掲載箇所）	
1882 年（明治 15 年）	心理新説（井上哲次郎氏抄譯） Alexander Bain (1875) “*Mental and moral science*”	「同情」	（巻之三　情緒論　第十一）
1885 年（明治 18 年）	倍因氏教育學（添田寿一氏抄譯） Alexander Bain (1878) “*Education as a science*”	「同情」	（p.41 など）
1883 年（明治 16 年）	教育學（伊澤修二氏著） 附録：教育學用語和英對譯分類一覧	「同感」	（第二章　情緒　p.102） （附録　p.13）
1882 年（明治 15 年）	學校管理法（伊澤修二氏著）	確認できず	
1881 年（明治 14 年）	小學教育新編（西村貞氏譯述） Thomas Morrison (1874), John Gill (1876), James Currrie (1861).	「共感」	（第二部　第三篇　第二章の第四部など）
1885 年（明治 18 年）	教育新論（高嶺秀夫氏譯） James Johonnot (1878) “*Principles and practice of teaching*”	「同情」	（p.20、p.557 など）
1882 年（明治 15 年）	論理略説（菊池大麓氏編述）	確認できず	
1883 年（明治 16 年）	論理新編（添田寿一氏氏譯） Stanley W. Jevons (1870) “*Elementary lessons in logic*”	原書に“sympathy”は含まれない	
1876 年（明治 9 年）	奚般氏心理學（西周氏譯） Joseph Haven (1857) “*Mental philosophy*”	「同感」	（第二区　第一部　第一編　第三章など）

の中に「共感」が含まれている。朱（2002）によれば、「共感」は中国出版の『漢語大詞典（羅，1995）』に掲載されていない、日本での新造語とされている（朱，2002, p.119）。この調査の中で使用された哲学事典の中で「共感」の語が掲載されている最も古いものが 1885 年（明治 18 年）の『教育・心理・論理述語詳解（普及舎，1885）』である。

『教育・心理・論理述語詳解（1885）』

『教育・心理・論理述語詳解』には、「共感」の項目に「同情ノ部ヲ見ル可シ」と書かれており、「同情」の項目には「［シンパシイ］同情ハ他人ノ快楽苦痛スル事ニ関シ己モ同様ニ之ニ感応スルノ義ニシテ即有意模倣ノ一種ナリ彼ノ同病相憐ムト云フモ亦此ノ意ニ外ナラズ之ヲ共感又ハ同感ト訳スルモアリ」と書かれている。つまり、1885 年の時点で「共感」は「同情」や「同感」と並んで、英語“sympathy”の訳語として位置づけられていたのだということを確認できたことになる。次に、具体的にどの資料において英語“sympathy”の訳語として「共感」の語が使われていたのかということが問題になる。同文献に記載されている文献リストを確認したところ、西村貞による『小学校教育新編』において「共感」という語が“sympathy”の訳語として使用されていることを確認することができた（表 1 に文献リストを示す）。この文献は、七星・川上（2016）において、共感という語の初出の文献として特定されているものである。

西村貞の『小学教育新編（1881）』

七星・川上（2016）は「この時代に、“sympathy”の訳語として「共感」という言葉がつくられた（p.37）」と考察しているが、問題は、なぜ西村が「共感」という語を使用したのかということである。表 1 に示されているように、他の多くの文献では“sympathy”の語は「同情」または「同感」と訳出されているからである。特に、西村（1881）が訳出するよりも前の時点で、矢島錦蔵が 1871 年に Alexander Bain の『*Mental and moral science: A compendium of psychology and ethics*（1868）』を『心理学（倍因氏）』として翻訳した際には、“sympathy”を「同情」と訳しており、西周が 1876 年に Joseph Haven の『*Mental philosophy: including the intellect, sensibilities, and will*』を『心理学』として翻訳した際には、“sympathy”を「同感」と訳している。

西村貞（1881）の『小学教育新編』は、John Gill の『*Introductory Text-book to School Education, Method, and School Management*（1876）』や、Thomas Morrison の『*Manual of school management*（1874）』などを翻訳編集したものである[6]。これらの原書の中で、“sympathy”の語は、特に Morrison（1874）の著作の中で使用されており、その箇所に対応する日本語訳が「小学教育新編」に見られる。ここで“sympathy”という語は、「賛同」や「仲間意識」に近い意味で使われている[7]。矢島の翻訳した「心理学（倍因氏）」や西周の翻訳した「心理学」における“sympathy”が、情動感染（emotional contagion）のように他者の感情が伝染する現象を指すのに使われているのとは、やや異なる概念を指しているように思われる

表 2　明治初期に異なる語に翻訳された“sympathy”の原文の比較

文献	原文	対訳（筆者訳）
矢島（1871）によって「同情」と翻訳された Bain（1868）における“sympathy”の用例	*SYMPATHY* is to enter into the feelings of another and to act them out, as if they were our own. (p.276)	《シンパシー》とは、他者の感情の中に入りこみ、あたかもその感情が自分自身のものであるかのように振る舞うことである。
西（1876）によって「同感」と翻訳された Haven（1859）における“sympathy”の用例	Closely allied to the emotions of joy and sorrow awakened by our own personal experience of good and of evil, is the *sympathy* we feel with the joys and sorrows of others in similar circumstances. Joy is contagious. (p.402)	自分自身が良い体験や悪い体験をすることによって生じる喜びや悲しみの感情とちょうど同じように、似たような状況に置かれた他者の喜びや悲しみに対して感じるのが《シンパシー》である。喜びというのは伝染するものなのだ。
西村（1881）によって「共感」と翻訳された Morrison（1874）における“sympathy”の用例	Animated by the presence and example of his comrades, a soldier will dare on the battle-field what he would shrink from contemplating if he were alone. If a thief by habit and repute is left in the company of thieves, he is more likely to continue the practice of stealing than if he is alone, or is brought into the close companionship of honest men. *Sympathy* is powerful for good or for evil. (p.81)	兵士というものは、一人きりであれば尻込みしてしまうようなことでも、僚友の存在や僚友のお手本があれば、戦場において勇気をもって実行するものである。ある泥棒が、仲間の泥棒達と一緒にいるのであれば、一人きりでいる時や、誠実な人と親密にしているときよりも、盗みを実行し続けるであろう。このように、《シンパシー》というのは、善に対しても悪に対しても強力に作用するのである。

（表 2 を参照）。

西村がなぜ、「同情」や「同感」という訳語を使わなかったのかは今となっては推測するしかない。学校管理法に関する文献の訳出にあたって、心理学の文献の訳語を直接参照しなかった可能性も考えられる。あるいは、原書に書かれている内容や文脈から、当時の心理学の文脈で使われていた“sympathy”とは別の訳語をつける方が適切だと考えたからかもしれない。いずれにせよ、“sympathy”という語が、文脈によってある程度異なる意味を持つ多義的な用語であるということは、訳語の多様性を考える上で無視できない点であると言えよう。

現在入手可能な資料を見る限り、1881 年の西村貞の「小学教育新編」よりも古い時代に「共感」という語が使用された例を現時点では見つけることができなかった。今後、もっと古い使用を示す資料が見出される可能性は否定できないため、暫定的な結論でしかないが、現時点では、「共感」という語は漢語由来ではなく、1881 年に西村貞によって、“sympathy”の訳語として使用されたのが最も初期の使用ということができよう。そして、1885 年には、「同情」や「同感」と並んで、英語“sympathy”の訳語の一つとして辞書に掲載されたのはまぎれもない事実である。

「共感」の語の普及の時期について

前節で見たように、「共感」という語が明治初期に“sympathy”の訳語として造られ、哲学辞書に掲載されていることを確認することができた。では、「共感」という語はその後どのように普及していったのだろうか。仲島（2006）が指摘しているように、現在我々が使うような意味での「共感」の語が国語辞典に掲載されるようになったのは、1949 年になってからである（新村，1949）。それ以前には、『哲学大辞書（大日本百科辞書編輯部，1912）』や『新英和大辞典』（岡倉，1940）などに掲載されてはいるものの、こうした辞書への掲載は、必ずしも日常語として使用されていたこと示すものではない[8)]。同時に、仲島（2006）が複数の例を挙げて示しているように、文学作品においては、1949 年よりも前の時期に「共感」の語の使用が見られ、中妻・サトウ（2019）も、20 世紀前半の心理学文献における「共感」の語の使用の例をいくつか挙げている。七星・川上（2016）は、新聞のデータベースを用いて「共感」という語の使用の年次変化を調べているが、その多くは 1980 年代以降のものに限られており（新聞見出しの調査には 1930 年代ものが含まれている）、20 世紀の前半の間に「共感」の語がどのように普及していったのかは明らかにはされていない。

本節では、文学作品と学術文献を対象に調査を行い、「共感」という語の使用頻度の確認を行った。比較対象とするために、同じ“sympathy”の訳語とされている「同情」の語の使用頻度についても調査対象とした。

文学作品における「共感」の語の使用

青空文庫は、文学作品の完全なアーカイブではないが、明治期から昭和初期にかけての作品を中心に、16,000 件以上の作品が電子化されて収録されており、容易に検索することができる。著作権が消滅していない作家の作品が含まれていなかったり、登録されている作家や作品には偏りがあるといった問題もあり、使用頻度に関する量的な証拠とはならないかもしれないが、「共感」という語の使用の変遷を概観するための参考にはなると考えられる。

調査方法．2021 年 8 月に、Google の検索機能を使っ

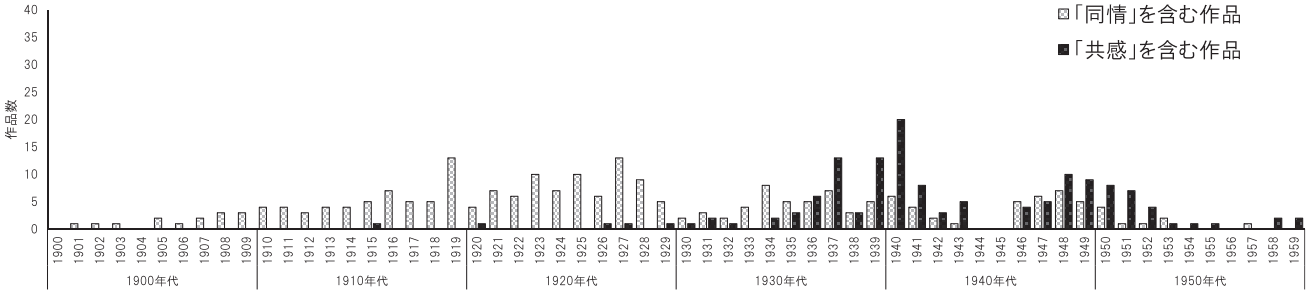

図 2.「青空文庫」で公開されている「同情」「共感」の語を含む作品の「初出」年別の作品数.

表 3　「青空文庫」に登録されている「共感」の語を含む 20 世紀初期の作品の表現

1910～1920 年代における「共感」の使用例	1930 年代の「共感」の使用例
1915 年　蒲原有明「龍土會の記」 「そんな風に勝手に論議が行はれたと云つても、會の席上では、食卓を同うするが如く相互に共感する餘裕を失はなかつたから、論議とは云へ、それは一の談笑に過ぎなかつた。」	**1932 年　三木清「歴史哲學」** そこで發展は神及び世界の本質から論理的に構成され、そして何よりも世界法則として見られるのでなく、却てそれは直觀され、藝術的感覺をもつて共感され、そして何よりも個々の歴史的有機體に於てかかる直觀にもたらされるのである。
1920 年　幸田露伴「平将門」 「群衆心理なぞと近頃しかつめらしく言ふが、人は時の拍子にかゝると途方も無いことを共感協行するものである。昔はそれを通り魔の所為だの天狗の所為だのと言つたものである。」	**1935 年　坂口安吾「悲願に就て」** 「さうして、この作品はいはばそののつぴきならぬ生の懊悩が、つまりは悲願とよぶところのものがこれを生み、この作品の方向を決定づけてゐるのだらうと思はれる。この作者の懊悩は私に共感できるものだつた。」
1926 年　蒲原有明「緑蔭叢書創刊期」 「西歐の文人と比較するならば、そこにフローベルの魂との共感が認められるといつてよい。」	**1937 年　戸坂潤「技術的精神とは何か」** 「三枝博音氏の「技術学のグレンツ・ゲビイト」は、その主旨に於て共感を禁じ得ない。私に云わせると、つまり近代の哲学は他ならぬ技術的精神によって貫かれねばならぬという主張であろう。」
1927 年　宮本百合子「沈丁花」 （初出時は中條百合子） 「友達に本当に成れるかどうかはる子にはその時わからなかったが、彼女の境遇には一種女としての共感というようなものが感じられた。」	**1938 年　北條民雄「柊の垣のうちから」** 苦悩の場合のみではなく、反対に心の中が満ち溢れ、幸福と平和とに浮き立つ時も、やはりその喜悦を人に語り共感されたい慾望を覚えるであらう。
1929 年　平林初之輔「商品としての近代小説」 「冬来りなば」の成功は大部分は一般の読者がマーク・セーバーに共感するためであり、この小説を好まない人はエフィーの挿話があまりありさうもない話であることをこの小説の欠点と見做すのである。	**1939 年　太宰治「八十八夜」** 「その人が、どこの国の人で、いつごろの人か、そんなことは、いまは思い出せなくていいんだ。いつか、むかし、あのとき、その人に寄せた共感を、ただそれだけを、いま実感として、ちらと再び掴みたい。けれども、それは、いかにしても、だめであった。」

て、青空文庫のドメインに含まれるファイルの中から「共感」の語を含むものを検索した。海外の作家の作品を翻訳したものは除外した。また、書かれた時期を特定するために、「初出」年で分類を行った。初出年が記載されていないものは、「底本の親本」の出版年や、本文中に記載されている、著者によって書かれたと思われる年を利用した。執筆時期の情報を特定できないものは分類から除外した。一つのファイルの中に複数の時期の作品が含まれている場合には、ファイル単位ではなく、作品単位で数えることとした。

「共感」を使用している作品の年次別の多寡を見ても、それが使用頻度の違いによるものなのかその年の作品の収録年数の違いによるのかを区別することができないため、比較対照のために、「同情」を含む作品も同様に検索し、年次別の分類を行った。1900 年から 1959 年までの 60 年分を対象とした。

結果. 作品中に「共感」の語を含み、初出年を特定できる作品は 140 件であった。また「同情」の語を含む作品は 240 件であった。初出年別の作品数の推移を図 2 に示す。1950 年代に入ってからは、「共感」または「同情」を含む作品の数は減少しているように見えるが、これは 2017 年の著作権法の改正で、1968 年以降に亡くなった作家の作品が基本的に青空文庫で公開されていないことによるものと考えられる。つまり、この時期の作品数の減少は、公開される作品の全体数が少なくなっていることによるものであり、「共感」や「同情」を含む作品が減少したことを反映しているわけではないと考えられる。

図 2 から明らかなように、「同情」の語を含む作品は、

1900 年代初頭から複数見られるのに対して、「共感」の語を含む作品は、1900〜1910 年代にはほとんど見られない。1920 年代に数件を数えるだけである。では、「共感」は戦後まで認知・定着しなかったのかというと、必ずしもそうではなく、1930 年代の中盤以降には、ほぼ毎年複数の文学作品で「共感」の語が見られるようになっている。このことから、1930 年代中盤には、「共感」の語が定着していたと考えられる。これは、朝日新聞の見出しにおける「共感」の初出が 1937 年であるという七星・川上（2016）の報告とも符合する結果だと言えよう。

1920 年代までに書かれて青空文庫で公開されている作品の中で「共感」の語を含むものは、5 件であった。当時どのような使われ方をしていたのかを個別に確認するために、「共感」の語が使われている箇所を表 3 に掲載した。時代の古い作品は日本語自体が現代語と異なっているために、「共感」の使われ方が現在と変わらないかどうかの判断は難しいが、1926 年の蒲原や 1927 年の宮本の作品での表現はあまり違和感なく読むことが出来ると思われる。

1930 年代の「共感」の使用については、三木（1932）のように、哲学的な言説の中で使われているために難解な作品も含まれてはいるが、多くの作品における「共感」の使用は、現在の言葉の感覚でも十分に了解できるものである。

以上のように、「同情」の語を含む作品が 1900 年代から多く見られるのに対して、「共感」の語を含むものは、1920 年代に現れ、1930 年代中盤以降に増えていったことがうかがえる。もちろん、青空文庫で公開されている作品は、当時の文献のうちのごく一部であり、これらのデータだけに基づいて、特定の語に関する当時の普及率を断定することはできない。しかしながら、少なくとも第二次世界大戦よりも前の時点において、十分に日本語として定着していたと考えることができそうである。

学術文献における「共感」の語の使用

学術的な文献における「共感」の使用の変遷を確認するために、学術論文などを公開しているインターネットサイト「J-stage」に収録されている文献のなかで、「共感」および「同情」の語を使用しているものを発行年ごとに確認することとした。

方法. 2021 年 8 〜 9 月に、J-stage の検索機能を使って、「共感」および「同情」の語を含む文献の数をカウントした。ただし、J-stage で公開されている文献の中には、学会発表抄録のように、同一のページに掲載されている別の記事の一部が同一のファイル内に含まれているために検索でヒットしてしまう場合があり、重複してカウントしないようにした。その他、OCR のミスによって「共感」と誤認識されたと思われる「其感（そのかん）」や、文字の並びが「・・共感・・」となっていても「共感」の語ではないもの（「共感覚」や、「各群共感染（かくぐん とも かんせん）」など）は除外した（ただし、「共感覚」の別の呼び方として「共感」という語を使用しているものは除外しなかった）。同様に、誤認識と思われるもの（「同精神科」の「同精」を「同情」と誤認識）や、文字の並びが「同情」となっているが「同情」ではないもの（「同情況」など）も掲載文献から除外した。また検索にヒットしてもファイルの文字情報を確認できないもの（6 件）については分析から除外した。

結果. 1900 年から 1959 年までの 60 年分の文献のうち、「共感」の語を含む文献および「同情」の語を含む文献の数の推移を図 3 に示した。「青空文庫」のような著作権の影響はないため、1950 年代に減少するという全体的な傾向は見られないが、「共感」および「同情」を含む文献の数の年次変化は、「青空文庫」の場合と類似している。いずれも、「同情」を含む作品・文献は、1900 年代から見られるが、「共感」の語を含むものは、1910 年代および 1920 年代にわずかに見られるだけだったのが、1930 年代中盤以降にはいずれも増加する傾向が見られる（ただし太平洋戦争の終戦年前後では減少している）。

1920 年代には、「心理学研究」において、ドイツの文献における“Miterleben”や“Mitgefühlen”などの訳語[9] として「共感」の語が使われているほか、ジェームズ・フレーザー（Frazer, 1890）の“Sympathetic Magic”の訳語としての「共感呪術」の語など専門用語としての使用がほとんどである。ただし「英文学研究」には「共鳴共感」という表現ではあるが、現在の日常語に通じる表現も見ら

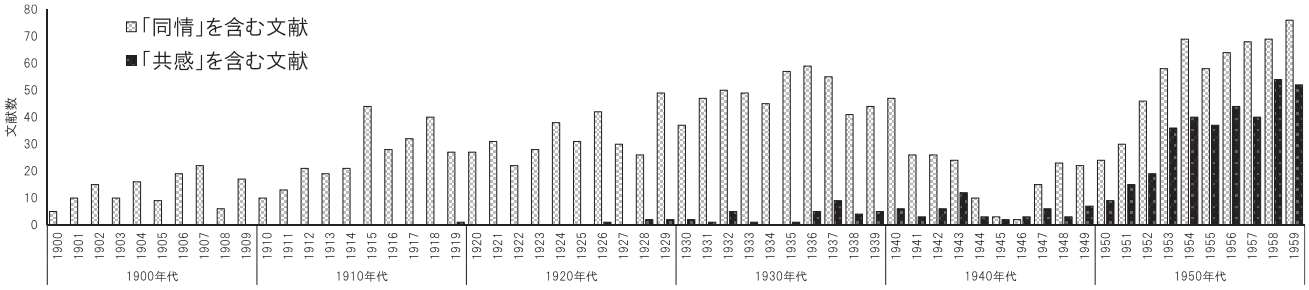

図 3. 「J-STAGE」で公開されている「同情」「共感」の語を含む文献の発行年別の文献数の推移.

れる（表4を参照）。

1930年代序盤には「心理学研究」においてドイツ語の訳として「共感」の使用が見られる。その他、「共感覚」の別称として「共感」という言葉が使われている事例がいくつか見られる。ドイツ語の訳として「共感」の語が使用された背景には、“Sympathie”に関するシェーラーの著作（Scheler, 1925）に見られるように、“Sympathie”に関連・類似した用語に対応する訳語として「同情」以外の類似の語が必要であったという背景があるように思われる。フレーザーの著作における「共感呪術」は、呪術の背景にある超自然的な遠隔的な作用[10]という考え方を示す概念である。これは“sympathy”という多義的な言葉の中でも、「相手と同じ気持ちになること（同情）」とはかなり異なる意味で使われており、「同情」という訳語をあてるのには無理があったことが背景にあると推察される。

1930年代後半になると、心理学系の学術誌よりも「英文学研究」などの文学系の学術誌に掲載された文献における使用が多くなる。心理学系の文献では「共感覚」の別称として使われているのが見られるだけである。また、1937年の「鐵と鋼」の記事は学術文献とは言えないかもしれないが、当時一般に報道された「共感を表明す」という表現が見られる。

1940～1950年代には、心理学系の学術誌で「共感」の語を含む文献はほとんど見られなくなり、「日本文学」「英文学研究」「ドイツ文學」など文学系の学術雑誌が多くなる。図には掲載していないが、心理学系の学術雑誌で「共感」の語が再び見られるようになるのは、ほぼ1960年代以降のことである（1958年の「心理学研究」の書評のなかで「共感」の語が見られる）。

文学系の学術誌では、他者や作品上の人物などに対する、感情を伴った賛同・賛意（共感を呼ぶ、共感を覚える）や肯定的な興味・関心（共感をそそる）、感情を伴った理解といった、必ずしも専門用語ではない、日常的な表現としての「共感」の使用が浸透していったことがうかがえる。

以上のように、J-stageで公開されている学術文献のなかで「共感」の語を使用しているものは、1930年代中盤以降に増え始めることが確認された。この傾向は、「青空文庫」で公開されている文学作品の場合や新聞の見出しの調査結果（七星・川上，2016）とも一致している。J-stageで公開されている文献もまた、学術出版物の内のごく一部であり、また全ての出版された学術文献が含まれている訳ではないことにも注意する必要がある。しかしながら、「共感」の語が、1930年代中盤以降に、特に文学の領域でその使用頻度が高くなっていったと見なすことができるであろう。

“Empathy”の訳語としての「共感」

これまで見てきたように、「共感」の語は明治時代に“sympathy”の訳語として造られたものであると考えられる。1910年代頃までは、哲学や美学などの専門用語として“sympathy”やそれに類似する概念の訳語として用いられていたものが、1920年代以降、徐々に日常語として使われるようになっていったことがうかがえる。では、現在のような“empathy”の訳語として用いられるようになったのには、どのような経緯があったのだろうか。

上述のように、“empathy”の語は、1916年には、「感情移入（Einfühlung）」に対応する英語として心理学の書籍に記載されている（高島，1916）。もともと“Einfühlung”の訳語として造られた“empathy”が日本に導入されたという経緯を考えれば当然のことと言える。心理学辞典においても、“empathy”には「感情移入」という訳語が使われており、“empathy”に「共感」という訳語が多くの心理学辞典で使われるようになるのは、1970～1980年代以降のことである（表5を参照）。

現時点では、日本の臨床心理学、特にRogersのカウンセリング論において、“empathy”の語を「共感」とするのは、ほぼ定訳のようになっているが、Rogersの著作の邦訳書では、はじめから「共感」の語が使われていたわけではない。Rogersの邦訳書が出版されたのは、友田不二男（1951）による『*Counseling & psychotherapy*（Rogers, 1942）』の訳本『臨床心理学』が最初であるが、もともとこの原書自体に“empathy”の語は使われていない。1955年には、『*Client-centered therapy*（Rogers, 1951）』の第1章と第2章が友田によって『精神療法（友田，1955）』として訳出されているが、その中で、“empathy”の語は、「感情移入」または「感情を移入」と訳されている。そして同書の第6章と第7章を訳出した『遊戯療法・集団療法（友田，1956）』では、“empathy”は「共鳴（p.91）」または「同情（p.107）」と訳され、「empathic feeling」は「同情（p.104）」と訳されている。さらに、同書では“empathy”だけでなく“sympathy”の語も同じく「同情」と訳されている（p.104）[11]。1957年には、友田は『*Psychotherapy and personality change*（Rogers & Dymond, 1954）』を『人格転換の心理（友田，1957）』として訳出しているが、ここでは“empathic understanding”を「感情を移入して理解したもの（p.3）」と訳している。このように、Rogersの著作が日本に導入された1950年代では、少なくとも出版された邦訳書においては、“empathy”は「共感」とは訳されていないのである。

Rogersの著作の翻訳において、“empathy”の語が「共感」と訳されたのは、1962年の伊東博による「カウンセリングの理論（伊東，1962）」のRogersの論文「治療における人格変容の必要にして十分な条件（Rogers,

表 4 「J-Stage」に登録されている 1910～1930 年代出版の文献での「共感」の用例

出版年	著者	掲載誌	内容の抜粋［用法など］
1910 年代			
1919	松永延造	心理研究	諸種の感覺と複合的に共感する［生理学用語］
1920 年代			
1926	橘覺勝	心理学研究	内的共感（inneres Miterleben）［Groos の用語］
1928	石田憲次	英文学研究	彼が特に Goethe の那邊に共鳴共感せるか
1928	城戸幡太郎	心理学研究	共感（Mitgefühen）［Scheler の用語］
1928	大場千秋	心理学研究	共感呪術［Frazer の用語］
1929	正木正	心理学研究	共感とは直観的なる変調に属する［Jaensch の用語］
1928	大場千秋	心理学研究	情緒的共感
1930 年代			
1930	正木正	心理学研究	特別の類型（共感者）［Jaensch の用語］
1930	佐久間鼎	心理学研究	同種の他の鳥が聞いて、いはゞ共感し、
1931	佐藤清	英文学研究	彼は時代精神の共感者と言へるのである。
1932	Y. Y.	英文学研究	うるほひある洞察と共感とに満つる独自の印象記
1932	大和資雄	英文学研究	鴎外漁史の「マンフレッド」に共感してゐる。
1932	勝田孝興	英文学研究	世界一般の讀者の共感を贏ち得るか
1932	杉浦正一	教育学研究	本能的共感（instinctive sympathy）
1932	倉澤剛	教育学研究	生徒の内面的共感を喚起して
1933	倉澤剛	教育学研究	「一體と感ぜしむる」同情共感に迄の教育は
1935	倉澤剛	教育学研究	個々の精神の一致（concord a delle menti）と共に、心情の共感（dei cuori）が齎されないうちは、
1936	飯塚浩二	地理学評論	人間と自然との直観的なる共感、
1936	石三次郎	教育学研究	原語の響に共感してその精神に育まれる。
1936	山極眞衛	教育学研究	共感し、或は追感する心情［追感の別称］
1936	記載なし（新刊紹介）	教育学研究	共感を抱くにも拘わらず
1936	飯田忠純	東洋音楽研究	一人の精神と他の精神との共感といふ様な場合も
1937	關敬吾	民族學研究	著者自身はこの地の原語感情に共感し得る
1937	唐澤勇	耳鼻咽喉科臨床	共感性瞳孔反射（konsensuelle Pupillenreaction）［生理学用語］
1937	M.O.N.（批評）	英文学研究	これは著者の共感がどの時代に最も多くむけられてゐるかをよく示してゐる
1937	織田正信	英文学研究	しかる後にはじめて彼の“luminous lyricism”に共感し得るのである。
1937	寺本喜一	英文学研究	精神上の共感と云ふ事があるならば、それと同時に肉體の共感と云ふ事も當然あらねばならないと考へる。
1937	商況	鐵と鋼	ムソリニ首相は〈中略〉日本に對し絶對の共感を表明すと論表す
1937	吉村武榮	教育学研究	現實肯定の文化的色彩を共感せしめる
1937	篠原助市	教育学研究	生徒の今迄知らなかつた新しい世界を生徒に示し、事態其の者に共感せしめ、問題の意味を喚びさまし、
1937	瀧遼一	東洋音楽研究	共感呪術［Frazer の用語］
1938	勝田孝興	英文学研究	自分の愛蘭人及び英蘭人に對する義憤に共感を持たず、只々戀のみを強調する彼女の無理解を嫌ふ。
1938	橘覺勝	心理学研究	冷感を共感せしむる［共感覚の別称］
1938	正木正	心理学研究	共感現象の類型的意味は［共感覚の別称］
1938	石三次郎	教育学研究	共感及び追感の能力の完成に依つて［追感の別称］
1939	織田正信	英文学研究	故に女性に個有の共感が生かされたならば、Forster は彼女等にとつて好題目である。

表 4　「J-Stage」に登録されている 1910～1930 年代出版の文献での「共感」の用例（つづき）

出版年	著者	掲載誌	内容の抜粋［用法など］
1939	石田憲次	英文学研究	共感共鳴を求める／かやうに文學藝術が共感共鳴を生命とするものであるならば、
1939	荻田庄五郎	英文学研究	彼が Newton の説に共感したのも、所詮は此の目的をよりよく達成せんとの意図に外ならなかつた。
1939	SASAKI（批評）	英文学研究	鍵盤を叩いたことのある者の方がピアノの演奏に餘計共感がもてるのと同じである。
1939	福原麟太郎	英文学研究	日本人はヂェ君のやうな思想や立場に共感するらしい

表 5　心理学関連辞書における“sympathy”、“empathy”、“Einfühlung”の訳語

出版年	辞典名	出版社	sympathy	empathy	Einfühlung
1953 年	心理学辞典	弘文堂	——	□感情移入（p.16）	□感情移入（p.16）
1956 年	岩波小辞典心理学	岩波書店	▲共感（p.38）	□感情移入（p.30）	□感情移入（p.30）
1956 年	現代心理学用語辞典	河出書房	——	□感情移入（p.36）	——
1956 年	教育心理学事典	金子書房	——	□感情移入（p.276）	□感情移入（p.276）
1957 年	心理学事典　※ 1	平凡社	（▲共感呪術）	□感情移入（感入）（p.106）	□感情移入（感入）（p.106）
1958 年	社会学辞典	有斐閣	▲共感（p.611, p.976） □同情（p.655）	□感情移入（p.119） ■共感（p.624）	□感情移入（p.119）
1965 年	岩波小辞典心理学第 2 版	岩波書店	▲共感（p.38）	□感情移入（p.30）	□感情移入（p.30）
1969 年	教育心理学新辞典 ※ 2	金子書房	□共鳴（同情）（p.214） □同情（p.687）	□感情移入（p.148） ■共感（p.196）	□感情移入（p.148）
1971 年	心理学辞典	誠信書房	□同情（p.11）	■共感（p.111）	□感情移入（p.90）
1971 年	心理学辞典	ミネルヴァ書房	□同情（p.284）	□感情移入（p.62）	□感情移入（p.62）
1974 年	児童臨床心理学事典 ※ 3	岩崎学術出版社	——	（■共感的理解（p.136）） （□感情移入的理解（p.261））	——
1974 年	哲学用語辞典	東京堂出版	□同情（p.310）	——	□感情移入（p.85）
1974 年	哲学小辞典	共同出版	□同情（p.28）	□感情移入（p.28）	□感情移入（p.28）
1975 年	増補改訂哲学・論理用語辞典	三一書房	——	□感情移入（p.69）	□感情移入（p.69）
1977 年	新・教育心理学事典	金子書房	□同情心（p.602）	□感情移入（p.136） ■共感（p.193）	——
1978 年	心理学小辞典	有斐閣	□同情・共感（p.199）	□エンパシー（pp.22-23） □感情移入（p.45、p.199）	□エンパシー（pp.22-23） □感情移入（p.45、p.199）
1978 年	心理学小辞典	共同出版	□同情（p.48）	■共感（p.48）	□感情移入（p.38） ●共感（p.38）
1979 年	岩波心理学小辞典	岩波書店	▲共感（p.52）	□感情移入（p.40）	□感情移入（p.40）
1981 年	誠信心理学辞典	誠信書房	□同情（p.102）	■共感（p.102）	□感情移入（p.79） ●共感（p.102）
1981 年	心理学事典	平凡社	——	□感情移入（p.126） ■共感性（p.547）	□感情移入（p.126）

※ 1．「Sympathy」の記載はないが、「共感呪術（sympathetic magic）」が記載されている。
※ 2．共感的学習（sympathetic learning）（p.196）、共感的理解（sympathetic understanding）（pp.196-197）、社会的共感性（sociempathy）（p.399）の記載がある。
※ 3．共感的理解（empathic understanding）（p.136）、感情移入的理解（empathic understanding）（p.261）の記載。

表 6　ロージァズ全集（岩崎学術出版社）における「共感」「感情移入」の語の使用

巻	タイトル	編訳	使用されている訳語	出版年
第 1 巻	問題児の治療	堀淑昭編；小野修訳	共感（sympathy）	1966
第 2 巻	カウンセリング	佐治守夫編；友田不二男訳	なし	1966
第 3 巻	サイコセラピィ	友田不二男編訳	共感（sympathy）	1966
第 4 巻	サイコセラピィの過程	伊東博編訳	感情移入	1966
第 5 巻	カウンセリングと教育	畠瀬稔編訳	共感	1967
第 6 巻	人間関係論	畠瀬稔編訳	共感・感情移入	1967
第 7 巻	プレイグループセラピィ・集団管理	畠瀬稔編訳	共感	1967
第 8 巻	パースナリティ理論	伊東博編訳	共感・感情移入	1967
第 9 巻	カウンセリングの技術	友田不二男編；児玉享子訳	なし	1967
第 10 巻	成功・失敗事例の研究	友田不二男編訳	共感・感情移入	1967
第 11 巻	カウンセリングの立場	友田不二男編訳	共感・感情移入	1967
第 12 巻	人間論	村山正治編訳	共感	1967
第 13 巻	パースナリティの変化	友田不二男編訳	感情移入	1967
第 14 巻	クライエント中心療法の初期の発展	伊東博編訳	感情移入	1967
第 15 巻	クライエント中心療法の最近の発展	伊東博編訳	共感・感情移入	1967
第 16 巻	カウンセリングの訓練	友田不二男編訳	共感・感情移入	1968
第 17 巻	クライエント中心療法の評価	伊東博編訳	共感	1967
第 18 巻	わが国のクライエント中心療法の研究	友田不二男、伊東博他編	共感・感情移入	1968
別巻 1	サイコセラピィの研究	友田不二男、手塚郁恵訳	共感	1972
別巻 2	サイコセラピィの成果	古屋健治［ほか］訳	感情移入	1972
別巻 3	サイコセラピィの実践	伊東博［ほか］訳	感情移入	1972
別巻 4/5	創造への教育：学習心理への挑戦　上下	友田不二男編；伊東博［ほか］訳	共感・感情移入	1972

1957）」の翻訳が恐らく最初である。ここでは、第 5 条件において「共感的な理解（empathic understanding）」という記載が見られる。しかしながら、それ以降、「共感」という訳が普及したという訳ではなく、1966 年から 1972 年にかけて、別巻を含めて 23 巻まで出版された「ロージァズ全集」では、“empathy”を「共感」と訳す場合と「感情移入」と訳す場合とが混在しているだけでなく、“sympathy”の語が「共感」と訳されているものもあり、訳語が一貫しているとは言いがたい（表 6 を参照）。また、1983 年に出版された入門書の「ロジャーズ：クライエント中心療法（佐治・飯長，1983）」でも章によって「共感」という語が使われたり、「感情移入」という語が使われたりしており、日本のロジャーズ派の心理学者達が一斉に“empathy”＝「共感」という訳を推し進めてきたとは言いがたい。また、1962 年に“empathy”を「共感」と訳した伊東博もその後の著作では、「共感」ではなく「感情移入」という訳語を使っている（e.g., 伊東，1970；オールセン，伊東・中野（訳），1972）。

そもそも“empathy”は“Einfühlung”の訳語として造られたものであり、20 世紀初頭から心理学の文献において「感情移入」＝“Einfühlung”＝“empathy”と記載されてきたことを考えれば、友田のように“empathy”を「感情移入」と訳すのは当然であるように思われる。では、伊東（1962）はなぜ、「共感」という訳語を使ったのだろうか。

測定される概念としての「共感（empathy）」

先述のように、この時代までの心理学辞典などの文献は、“empathy”＝「感情移入」と記載されているのが一般的だったわけであるが、1950 年代中盤以降、心理測定を行っている研究者の間で“empathy”に対して「共感」という訳を使っている例が散見されるようになる。

1960 年には「心理学研究」誌において、Kerr（1955）の「Empathy Test」を豊原（1960）が「共感性テスト」と命名している（ただし、豊原は「『感情移入テスト』と訳すこともできるかと思う（p.142）」とも書いており、「共感」という訳語の使用に対しては若干の躊躇が見られる）。こうした訳語の使用の背景にはおそらく、1950 年代中盤から、ソシオメトリーの研究の中で Ausubel（e.g., Ausubel, D. P., 1955; Ausubel, Schiff, & Gasser, 1952）の“sociempathy”の概念を「社会的共感性」と訳していた田中熊次郎の一連の研究が関連しているのかもしれない（e.g., 田中，1954，1956，1957）。

その他、臨床心理学の領域では、ロールシャッハ・テストの解説書（本明・外林（編），1958）において、「共感性（Empathy）（p.88）」や「共感する能力― Empathy―を（p.90）」などの記述が見られるなど、個人の能力の測定・査定という領域においては、「empathy」を「共感（性）」と訳すという使い方が少しずつ拡がってきたことがうかがえる。

その他、1958 年の「社会学辞典」の中にも「共感（empathy）」の記載がある（ただし、この表現は「適応」という項目の中で記述されているだけであり、項目としての「共感」には「共感（sympathy）」と記載されている）。この「適応」の項目を執筆した岡部慶三は集団行動に関する研究に関わっていた心理学者である。この項目の中の「他人の気持を正確に共感（empathy）し」という記述から、社会心理学的な研究における他者理解の正確さを測定するという概念を念頭において記述されたと推測される。

井村恒郎の「心理療法（1952 年）」における「共感性」

心理臨床に関連した分野での「共感」の語の使用において重要な影響を与えたと考えられるのが井村恒郎の「心理療法（井村，1952）」である。この著作には、精神分析だけでなく、森田療法や、非指示的療法、遊び療法（play therapy）、集団療法（group therapy）など、Rogers に関連した様々な心理療法を踏まえた上で、心理療法全般に対する説明がなされている。この中で特に注目すべきなのが、第 2 章第 4 節の「治療者の資格」である。ここでは、「知識と技能」「安定性」「正しい自己評価」に加えて「共感性」という計 4 つの項目が治療者の資格として挙げられている。

井村が「治療者の資格」として 4 つの項目を掲げているのは、Rogers が『問題児の治療（1939）』の中で「治療者の資格（Qualification of therapist）」として掲げた 4 項目とある程度重複するように思われる。井村が第一に挙げた「知識と技能」は、Rogers が第 4 の資格として挙げた「心理学的知識（psychological knowledge）」に相当すると考えられるが、その重み付けの点では明らかに Rogers とは異なっている。井村が第二に挙げた「安定性」と第四に挙げた「正しい自己評価」は、Rogers が第 3 の資格として挙げた「自己の理解（An understanding of the self）」に対応すると考えられる。そして、井村の第三の資格「共感性」については、以下のように書かれている：

> 治療者は、相手の愛情の動きにまきこまれてしまつてはならないが、しかし、その動きをよく理解するために敏感でなければならない。〈中略〉相手の言葉をきくとき、言葉の文字どおりの意味をとらえる以上に、〈中略〉相手が言葉をつかつた現在の状況において、彼自身のどういう考え方や感じ方を表現しているか、という臨場的意味 occasional meaning をとらえねばならないのである。この臨場的意味を理解するためには、言葉を語るときの相手の態度に敏感であるとともに、相手の日頃の感じ方や考え方について共感できることが理解の背景になる。〈中略〉共感が、安価な同情や性急な反撥に転化してしまつてはならないことは、いうまでもない。共感は、理解のための共感である。この制限のもとで、なお共感ををもちつゞけるための支えは、治療者が、その仕事についていだく誠実さである。〈中略〉心理療法を行う者にとつては、相手を治しうるという自信よりも、相手が治りうるという信頼のほうが大切である（井村，1952，pp. 50-51）。

ここで述べられていることは、ロジャーズ（Rogers, 1939）の第 1 の資格「客観性（Objectivity）」と第 2 の資格「個人の尊重（Respect of the individual）」に関連していると思われる。井村はこの部分に「共感性」という見出しをつけてはいるものの、専門用語として対応する英語を記載しているわけではない。しかしながら、ここで使われている「共感」や「同情」という言葉は、Rogers（1939）が治療者の資格として掲げた客観性を説明するために使用した“sympathy”の語を意識して使われている可能性がある。井村が共感を重視しながらも、「共感が安価な同情になってはならない」と表現するところは、Rogers（1939, p.281）において“a capacity of sympathy（シンパシーの能力）”を重視しながらも、“deeply sympathetic（過度にシンパシー）”である人物の態度とは全く異なる、と記述されているのと相通ずるところがあるように思われる（“sympathy（sympathetic）”の語を肯定的な意味と否定的な意味の両方で使っている Rogers の記述よりも、「共感」と「同情」という 2 つの異なる語を使って記述する表現の方が読み手には理解しやすいのではないだろうか）。また「共感性」という項目を掲げている点や、「理解のための共感」という表現は、井村のこの著作出版の 5 年後に Rogers が発表する論文『The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change（Rogers, 1957）』における「共感的理解（empathic understanding）」を思い起こさせるものである。井村は、1954 年の論文でも「距離をおいて見る観照的態度に傾くこともあれば、距離をちぢめて共感する共振的態度に傾くこともあれば、また相手を救うという援助的態度のつよく出ることもある（井村，1954，p.437）」というように、治療者として相手を理解する時の態度を表現する際にやはり「共感」の語を使っている。

『心理療法（井村，1952）』は、出版された同年（1952 年）に、雑誌「青年心理」上でも紹介されており（桂，1952）、幅広く当時の日本の心理療法家の目に触れたのではないかと推察される。たとえば 1956 年の論文で精

神科医の黒丸正四郎は、ヤスパース（Jaspers）が使っている“Einfühlung”のことを「共感」と表現している（黒丸，1956，p.239）。1953 年に出版されている邦訳書「精神病理學総論（内村ら訳，1953）」ではこの語は「感情移入」と訳出されているにもかかわらず、治療者による患者の内面の理解のことを敢えて「共感」と表現しているのには、井村（1952）の影響が少なからずあったのではないかと推察される（あるいは、臨床の現場で「共感」という表現が既に一般的になっていたのかもしれない）。

共感的理解（empathic understanding）という表現

1950 年代当時に井村と同じ国立精神衛生研究所に所属していた佐治守夫は、「心理療法」と題した一連の解説論文（佐治，1955，1956a，1956b）の中で、井村（1952）を参考文献に挙げながら、心理療法の治療者の態度について以下のように記している：

> 治療者はたしかに感情的に安定したパースナリテイでなければならぬ。だがこのことは、患者の感情的な動きに鈍感であっていいと述べているのではない。事情はまさに逆である。相手の感情のうごきにまきこまれてはならないが、しかし相手の感情には敏感に共鳴することができるような、共感性をそなえたパースナリティでなければならない。〈中略〉共感が手軽な早のみこみや安価な同情と区別さるべきなのはいうまでもない。共感は理解のための共感である（佐治，1955，p.334）。

佐治はこの短い解説論文の中で「共感」という言葉を５回使用しており、この言葉が心理療法における重要な概念を指すものであることを十分に意識していることがうかがえる。また、1958 年の「異常心理学講座（井村ら（編））」に掲載されている「心理療法（一）」における非指示的心理療法の中で、佐治は以下のように記述している：

> クライエントが見ているがままの世界、彼の知覺しているがままの世界を治療者が共感的に理解していることを、クライエントに傳達することによつて、クライエントが自らの知覺している世界を探求していく仕方が促進される（佐治，1958，p.18）。

佐治はこの記述を含む章の文献のなかで Rogers（1951）を挙げており、この記述が Rogers の「to perceive the world as the client sees it, to perceive the client himself as he is seen by himself, . . . and to communicate something of this empathic understanding to the client（p.29）」に対応していることが示唆される。明示的に訳語として使っているわけではないが、「empathic understanding」を「共感的に理解していること」という日本語で表現しているのは明らかである。

ただし、佐治（1960）では、Rogers の「必要十分条件」論文（Rogers, 1957）の内容を積極的に取り上げ、その第５条件の部分を説明する際には、「empathic（共感的、感情移入的）な理解（p.67）」という表現を使っている。おそらく、当時の正当な訳語である「感情移入」を無視することはできないが、それでも「共感」という語の方が、この概念を伝えるのに適しているという佐治の考えが反映されているのではないかと推察される。

以上のように、心理臨床の分野では、Rogers の必要十分条件が出版される前から、ロジャーズ的な非指示的心理療法を支持する日本の心理療法家の間で、クライエントを理解するための態度を「共感」という日本語で（訳語としてではなく）表現するという習慣がある程度定着していたのではないだろうか。伊東博が 1962 年に、Rogers の必要十分条件論文を訳出する際に“empathic understanding”に対応する日本語として「感情移入的理解」ではなく「共感的理解」という言葉を使った背景には、そのような「共感」という言葉の普及があったのであろう。

それでも先に述べたように、“empathy”に対する訳語は「共感」と「感情移入」とが併存する状況がしばらくの間続くことになる[12]。1980 年代以降には、「感情移入」という日本語が使われなくなるわけではないが、“empathy”の訳語としては「共感」の語を使うことが広く普及していったようである。

結語

「共感」の語は、多義的な概念である“sympathy”の訳語の一つとして、「同情」とは別の訳語として恐らく 1881 年に日本で造られたようである。1885 年には“sympathy”の訳語として辞書にも掲載されたが、当時日本語としては普及せず、“sympathy（または Sympathie）”の訳語として「同情」の語を使いにくい文脈でのみ使われていたようである。20 世紀初頭には、一部の領域の専門用語として使われていたが、徐々に文学や文学研究の領域で、作品や作者に共鳴するという意味で使われるようになり、1930 年代中盤以降には、日常的な言葉として浸透していったようである。

1950 年代には、英語圏の心理学の領域で広く使われはじめた“empathy”の語が日本にも導入され、特に“sympathy”と“empathy”とを対比させるような理論的な精緻化が進む中で、「同情」と「共感」の語を対比させるような用法が進んできたのだと考えられる。

英語の“empathy”はドイツ語の“Einfühlung”の訳語として造られたのであるから、“Einfühlung”と同じく「感情移入」と訳すべきだという考え方は正論かもしれないが、本稿で概観してきた以下のような歴史的経緯を考えると、事態はそれほど単純なものではないと言えよう。

1．この概念を提唱したLipps自身が“Einfühlung”と“Sympathie”がほぼ同等であると記述している（ただし、Lippsの著述の中にはそうではない記述も見られる）。
2．Titchenerは意図的に“sympathy”に似せるように“empathy”という語を造ったが、語源としたギリシャ語“εμπάθεια（エンパテイア）”には“Einfühlung（感情移入）”の意味は含まれておらず、この訳語には当時多くの批判的な意見があった。
3．1950年代から英語圏で“empathy”の語が広く普及することにつながったRogersの理論で使われたこの語の意味は、Lippsによる“Einfühlung”の意味と完全には同じではない。
4．「共感」の語は当初“sympathy”の訳語として造られたが、1930年代以降、独自の意味を持つ日本語として定着していた。

要するに、“empathy”は“Einfühlung”の訳語であって、“sympathy”とは全く別の語である、というわけではない。あくまでも理論的精緻化の中で、これらの語を区別するような概念化が進んできたのであって、そうした区別は、これらの語の語源や出自に由来するわけではない。同様に、「共感」の語も元は“sympathy”の訳語として造られたが、“Miterleben”など様々な語の訳語としても使用されつつ、日常語として定着する中で現在の語義を獲得してきたのである。

なぜ“empathy”の訳として「共感」の語が使われるようになったのかについていくつか理由を挙げることはできるかもしれない。たとえば、「同情」の一種ではあるが、憐れみの意味を含まない状態を表現するのに「同情」とは違うニュアンスの言葉として「共感」の語は都合が良かったのかもしれない。また、「感情移入」というのは、感情を移入するというまさに心のプロセスを表現した言葉となっており、測定対象となるような個人の能力や特性を表現するのには、「感情移入」よりも「共感」の方が都合が良かったのかもしれない。そうした後付けの説明をすることはいくらでもできるが、理由はともかく、現時点では、現状のように定着したということである。

引用文献

Allport, G. W. (1937). *Personality: A psychological interpretation*. Holt.

Ausubel, D. P. (1955). Sociempathy as a function of sociometric status in an adolescent group. *Human Relations*, **8**, 75-84.

Ausubel, D. P., Schiff, H. M., & Gasser, E. B. (1952). A preliminary study of developmental trends in sociempathy: Accuracy of perception of own and others' sociometric status. *Child Development*, **23**, 111-28.

倍因亜歴山（ベイン，A.）（著）・矢島錦蔵（訳）（1871）．心理学（倍因氏）．［Bain, A. (1868). *Mental and moral science*. London: Longmans, Green, and Company.］

Baldwin, J. M. (1906). *Thoughts and things volume. 1: Functional logic, or genetic theory of knowledge*. New Nork: Macmillan.

Becker, H. (1931). Some forms of sympathy: a phenomenological analysis. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **26**(1), 58-68.

Boring, E. G., Langfeld, H. S., & Weld, H. P. (1939). *Introduction to psychology*. New York: Wiley.

ブレイディみかこ（2021）．他者の靴を履く：アナーキック・エンパシーのすすめ．文藝春秋.

Bullough, E. (1908). The 'perspective problem' in the aesthetic appreciation of single colours. *British Journal of Psychology*, **2**(4), 406-463.

Currie, J. (1872). *The principles and practice of common-school education*. London: Thomas Laurie.

大日本百科辞書編輯部（編）（1912）．哲学大辞書．同文館.

Darwin, C. (1872). *Expression of the emotions in man and animals*. London: John Murray.［ダーウィン，C.（著）浜中浜太郎（訳）（1931）．人及び動物の表情について．岩波書店.］

Dymond, R. F. (1948). A preliminary investigation of the relation of insight and empathy. *Journal of Counseling Psychology*, **12**(4), 228-233.

Dymond, R. F. (1949). A scale for the measurement of empathic ability. *Journal of Consulting Psychology*, **13**(2), 127-133.

Ewald, O. (1908). German philosophy in 1907. *Philosophical Review*, **17**(4), 400-426.

Frazer, J. G. (1890). *The golden bough*. London: Macmillan and Company.［フレーザー，J.G.（著）吉岡晶子（訳）（2011）．図説金枝篇（上下）．講談社.］

深田康算（1913）．リップス教授の美學（一）．心理研究，**4**(19)，40-53.

福武直・日高六郎・髙橋徹（編）（1958）．社会学辞典．有斐閣.

普及舎（編）（1885）．教育・心理・論理述語詳解．普及舎.

Gill, J. (1876). *Introductory text-book to school education, method, and school management*. London: Longmans, Green, Reader, and Dyer.

Goldstein, A. P., & Michaels, G. Y. (1985). *Empathy: Development, training, and consequences*. NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

長谷川寿一（2015）．共感性研究の意義と課題．心理学評論，**58**(3)，411-420.

Hume, D. (1739). *A treatise of human nature*. London: printed for John Noon.

ヒューム，D.（著）大槻春彦（訳）（1951）．人性論　第二篇　情緒に就いて．岩波書店．［Hume, D. (1739). *A treatise of human nature*. London: printed for John Noon.］

井村恒郎（1952）．心理療法（臨床心理学叢書）．世界社.

井村恒郎（1954）．面接によるパースナリティーのとらえ方．青年心理，**5**(4)，435-437.
井上哲次郎（1882）．心理新説．青木輔清．
伊東博（1962）．カウンセリングの理論．誠信書房．
伊東博（1970）．ロジャーズの発展（来談者中心療法（特集））．教育と医学，**18**(1)，4-10.
伊澤修二（1882）．學校管理法．白梅書屋．
伊澤修二（1883）．教育學．丸善商社．
Jahoda, G.（2005）. Theodor Lipps and the shift from "sympathy" to "empathy". *Journal of the History of the Behavioral Sciences*, **41**(2), 151-163.
ヤスペルス，K．内村祐之・西丸四方・島崎敏樹・岡田敬藏（訳）（1953）．精神病理學總論．岩波書店．［Jaspers, K.（1913/1946）. *Alllgemeine Psycho-pathologie*. Berlin: Springer.］
蒲原有明（1926/1938）．緑蔭叢書創刊期．飛雲抄：随筆（pp. 234-239）．書物展望社．
上武正二・（編）（1974）．児童心理学事典．共同出版．
桂広介（1952）．井村恒郎著「心理療法」．青年心理，3(2)，215.
Kerr, W. A. *The empathy test*. Psychometric Affiliates.
菊池大麓（1881）．論理略説．同盟舎．
北村晴郎（監）（1978）．心理学小辞典．共同出版．
黒丸正四郎（1956）．臨床心理学の方法論的考察．教育心理学研究，**3**(4)，236-241.
Lanzoni, S.（2017）. *Empathy: A history*. University Press.
Lasswitz, K.（1895）. Über psychophysische Energie und ihre Faktoren. *Archiv für systematische Philosophie*, **1**, 46-64.
Lee, V.（1912）. *Beauty & ugliness: And other studies in psychological æsthetics*. London: John Lane.
Lipps, T.（1903a/1909）. *Leitfaden der Psychologie, dritte, teilweise umgearbeitete Auflage*. Leipzig: Engelmann.［リップス，T.（著）大脇義一（訳）（1934）．心理學原論．岩波書店．］
Lipps, T.（1903b）. *Ästhetik: Psychologie des Schönen und der Kunst*. Hamburg & Leipzig: Voss.
羅竹風（1995）．漢語大詞典．汉语大词典出版社．
McDougall, W.（1908/1936）. *An introduction to social psychology*. Dover.
Mead, G. H.（1934）. *Mind, self, and society from the standpoint of a social behaviorist*. University of Chicago Press.［ミード，G.H.（著）山本雄二（訳）（2021）．精神・自我・社会．みすず書房．］
三木清（1932）．歴史哲學．岩波書店．
南博（編）（1956）．現代心理学用語辞典．河出書房．
三渡幸雄（編）（1974）．哲学小辞典．共同出版．
宮城音弥（編）（1956）．岩波小辞典心理学．岩波書店．
宮城音弥（編）（1965）．岩波小辞典心理学第２版．岩波書店．
宮城音弥（編）（1979）．心理学小辞典．岩波書店．
宮本百合子（1927/1952）．沈丁花．宮本百合子全集３（pp. 257-266）．河出書房．
Morrison, T.（1874）. *Manual of school management: For the use of teachers, students, & pupil-teachers*. Glasgow: William Hamilton.
本明寛・外林大作（編）（1958）．ロールシャッハ・テスト（心理診断法双書）．中山書店．
村治能就（編）（1974）．哲学用語辞典．東京堂出版．
Murray, H. A.（1938）. *Explorations in personality*. New York: Oxford University Press.
Murray, J. A. H., Bradley, H., Craigie, W. A., & Onions, C. T.,（1919）. *A new English dictionary: Volume IX. Part II*. Oxford: At The Clarendon Press.
Murray, J. A. H., Bradley, H., Craigie, W. A., & Onions, C. T.,（1933）. *The Oxford English dictionary: Being a corrected re-issue with an introduction, supplement, and bibliography of a new English dictionary on historical principles*. Oxford: At The Clarendon Press.
仲島陽一（2006）．共感を考える．創風社．
中妻拓也・サトウタツヤ（2019）．1950年代までの日本における「共感」研究の動向と転換点．日本心理学会第83回大会発表論文集，39.
七星純子・川上和宏（2016）．第３章　新聞分析からみた「共感」がもつ現代的意味に関する一考察（pp.35-50）．千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書．
西周（1876）．心理学．文部省．［Haven, J.（1857）. *Mental philosophy*. Boston: Gould & Lincoln.］
西村貞（1881）．小学教育新編．金港堂．
Ohlsen, M. M.（1970）. *Group counseling*. New York: Holt, Rinehart and Winston.［オールセン，M.（著）伊東博・中野良顕（訳）（1972）．グループ・カウンセリング．誠信書房．］
岡倉由三郎（編）（1949）．新英和大辭典．研究者．
大山正（編）（1978）．心理学小辞典．有斐閣．
Rogers, C. R.（1939）. *The clinical treatment of the problem child*. Boston: Houghton Mifflin Company.
Rogers, C. R.（1942）. *Counseling and psychotherapy: Newer Concepts in Practice*. Boston: Houghton Mifflin Company.
Rogers, C.（1949）. The attitude and orientation of the counselor in Client-Centered Therapy. *Journal of Consulting Psychology*, **13**, 82-94.
Rogers, C. R.（1951）. *Client-centered therapy: Its current practice, implications, and theory*. Houghton Mifflin.
Rogers, C. R.（1952）. Dealing with interpersonal conflict. *Pastoral Psychology*, **3**(8), 14-20.
Rogers, C. R.（1956）. Client-centered theory. *Journal of Counseling Psychology*, **3**(2), 115-120.
Rogers, C. R.（1957）. The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology*, **21**(2), 95-103.
Rogers, C. R.（1975）. Empathic — an unappreciated way of being. *Counseling Psychologist*, **5**(2), 2-10.
Rogers, C. R., & Becker, R.（1950）. A Basic Orientation for Counseling. *Pastoral Psychology*, **1**(1), 26-34.
ロージァズ，C.R.，ダイモンド，R.（編著），友田不二男（訳）（1957）．人格転換の心理．岩崎書店．［Rogers, C. R., & Dymond, R.（1954）. *Psychotherapy and personality change*（Part 1, 2, and 4）.］

ロージァズ，C.R.（著），友田不二男（訳）（1951）．臨床心理学．創元社．［Rogers, C. R.（1942）. *Counseling and psychotherapy: Newer Concepts in Practice*. Boston: Houghton Mifflin Company.］
ロージァズ，C.R.（著），友田不二男（訳）（1955）．精神療法．岩崎書店．［Rogers, C. R.（1951）. *Client-centered therapy*（Part 1）.］
ロージァズ，C.R.（著），友田不二男（訳）（1956）．遊戯療法・集団療法．岩崎書店．［Rogers, C. R.（1951）. *Client-centered therapy*（Chapter 6 and 7）.］
相良守次（編）（1953）．心理学辞典（アテネ文庫）．弘文堂．
佐治守夫（1955）．心理療法－1．児童心理と精神衛生，**5**（4），328-335.
佐治守夫（1956a）．心理療法－2．児童心理と精神衛生，**5**（5），399-408.
佐治守夫（1956b）．心理療法－3．児童心理と精神衛生，**5**（6），491-499.
佐治守夫（1958）．心理療法（一）．井村恒郎ら（編）異常心理學講座第1部異常心理學(f)異常心理の治療・相談・處置．みすず書房．
佐治守夫（1960）．クライエント中心療法の最近の発展．精神衛生研究，**8**，64-75.
佐治守夫・飯長喜一郎（編）（1983）．ロジャーズ・クライエント中心療法：カウンセリングの核心を学ぶ．有斐閣．
Scheler, M.（1923）. *Wesen und Formen der Sympathie*. Bonn: Friedrich Cohen.［シェーラー，M.（著）青木茂・小林茂・飯島宗亨（訳）（1977）．同情の本質と諸形式．白水社．］
新村出（編）（1949）．言林．全國書房．
思想の科学研究会（編）（1975）．増補改訂哲学・論理用語辞典．三一書房．
Shostrom, E.（1965）. *Three approaches to psychotherapy* [Motion pictures]. Psychological Films Inc.
Smith, A.（1759）. *The theory of moral sentiments*. London: Printed for A. Millar, and A. Kincaid and J. Bell.［スミス，A.（著）高哲男（訳）（2013）．道徳感情論．講談社．］
添田寿一（1885）．倍因氏教育學．酒井清造．
添田寿一（1883）．論理新編．丸家善七．
園原太郎・柿崎祐一・本吉良治（監）（1971）．心理学辞典．ミネルヴァ書房．
外林大作・辻正三・島津一夫・能美義博（編）（1971）．心理学辞典．誠信書房．
外林大作・辻正三・島津一夫・能美義博（編）（1981）．誠信心理学辞典．誠信書房．
Spencer, H.（1870）. *The principles of psychology*. London: Williams and Norgate.
スペンサー，H.（著）森村進（訳）（2017）．ハーバート・スペンサーコレクション．筑摩書房．
高嶺秀夫（1885）．教育新論．東京茗渓会．
高島平三郎（1916）．教育的心理學（参訂）．啓成社．
田中熊次郎（1954）．学級社会における社会的共感性の分析．日本心理学会第18回大会講演抄録，37.
田中熊次郎（1956）．学級社会における「社会的共感性」の発達と変容．教育心理学研究，**3**（3），133-145.
田中熊次郎（1957）．児童集団心理学．明治図書．
Titchener, E. B.（1895）. A psychophysical vocabulary. *American Journal of Psychology*, **7**（1）, 78-85.
Titchener, E. B.（1909）. *Lectures on the experimental psychology of the thought processes*. NY: The MacMillan Company.
Titchener, E. B.（1924）. *A textbook of psychology*. New York: Macmillan.
友田不二男他（編）（1968）．ロージァズ全集18わが国のクライエント中心療法の研究．岩崎学術出版社．
豊原信男（編）（1960）．産業心理学関係文献紹介及び批判．心理学研究，**31**（2），140-146.
内山喜久雄（監）（1974）．児童臨床心理学事典．岩崎学術出版社．
梅津八三・相良守次・宮城音弥・依田新（編）（1957）．心理学事典．平凡社．
梅津八三・相良守次・宮城音弥・依田新（1981）．心理学事典（新版）．平凡社．
牛島義友（編）（1956）．教育心理学事典．金子書房．
Wispé, L.（1987）. History of the concept of empathy. In N. Eisenberg & J. Strayer（Eds.）, *Empathy and its development*（pp.17-37）. Cambridge University Press.
依田新（監）（1977）．新・教育心理学事典．金子書房．
朱京偉（2002）．明治期における近代哲学用語の成立：哲学辞典類による検証．日本語科学，**12**，96-127.

注

1) “Empathy”の歴史について詳述しているLanzoni（2017）によると、ほぼ同時期（1908年）に、Edward Titchenerと、James Wardがそれぞれ、編集を行っている学術雑誌において、ドイツ語“Einfühlung”の訳語として“sympathy”の語を使っている論文に対して、“empathy”という訳語を使うことを推奨したのが最初である．*The British Journal of Psychology* 誌の第2巻第4号（1908年10月発行）に掲載されたBullough（1908）の論文の脚注（p.444）では「The term ‘empathy’ has been suggested by Prof. J. Ward as translation for ‘Einfühlung’ and will be used as such hereafter.」という記載を、また、*Philosophical Review* 誌の第17巻第4号（1908年7月発行）に掲載されたEwald（1908）によるドイツの哲学研究に関するレビュー記事の脚注（p.407）では「Professor E. B. Titchener has suggested the introduction of the term “enpathy” as an equivalent for *Einfühlung*.」という記載を見ることができる．ここで“enpathy”という表記は誤植であり、同誌同巻の第6号（1908年11月号発行）で“empathy”と訂正されている．さらに厳密に言えば、“empathy”という英単語そのものは、それよりも前の1895年に *Philosophical Review* 誌の第4巻第6号（1895年11月発行）の海外の論文の要約を紹介する記事において、K. LasswitzのUeber psychophysische Energie und ihre Factoren（Lasswitz, 1895）という論文の中にでてくる「心理生理学的なエネルギーの要因（the capacity factor of psychophysical energy）」を指すために造られた“Empathie”というドイツ語に対する訳語と

して“empathy”の語が使用されている（p.673）．ただし、その論文の中で使われている“Empathie”という概念およびその英訳としての“empathy”という英語が定着することはなかったようである（Lanzoni, 2017, p.297）．
また、Oxford English Dictionary（Murray et al., 1933）には、Titchener の使用に先んじて 1904 年に Vernon Lee が“empathy”の語を使用したかのような記載が見られるが、Jahoda（2005）が指摘しているように、これは 1912 年の Lee の著作（Lee, 1912）の中で回想的に書かれた日付に基づくものであると考えるのが適当であると思われる．この著作の中で、Lee 自身が Titchener（1909）を引用しながら、「Titchener がそれ（Einfühlung）を Empathy と翻訳した」と 2 箇所で明記しているからである（Lee, 1912, p.20 および p.46）．

2）あたかも Mead が“empathy”について記述しているかのような明らかな誤引用を行っている文献も見られるが（e.g., Goldstein & Michaels, 1985）、Mead（1934）のこの本の中に“empathy”の記述はない．

3）Lipps は著書『*Ästhetick*（Lipps, 1903b）』の中で“Nur ein anderes Wort für die Einfühlung scheint das Wort “Sympathie.”（p.139）”と書いている．

4）長谷川（2015）は、「Lipps はギリシャ語で Einfühlung に相当する empatheia（ギリシャ語の原義は強い感情あるいは情念）を提示し（p.414）」と主張しているが、“Einfühlung”に相当するギリシャ語について Lipps が言及したことを示す文献を見つけることはできなかった．

5）1960 年代に撮影された Rogers の有名な映像作品である「*Three approaches to psychotherapy*（Shostrom, 1965）」の冒頭部分において、有名なセラピストの 3 条件に関する内容が Rogers 自身によって語られているが、そこでは「empathy」や「empathic」といった言葉は一切使われていない．Rogers が、著作のタイトルとしてこの語を使うようになるのは、1975 年以降（論文「Empathic — an unappreciated way of being（Rogers, 1975）」）である．

6）七星・川上（2016）では、西村の『小学教育新編』の原書として John Gill の『*Introductory Text-book to School Education, Method, and School Management*』だけを挙げているが、実際には、同書の例言の中に明記されているように、上述の書に加えて、トーマス・モリソン（Thomas Morrison）の『學校管理法（*Manual of school management*）』とジェームズ・カリー（James Currie）の『小學教育（*The principles and practice of common-school education*）』の 3 冊を翻訳編集したものであり、「共感」という訳語は、Morrison の著作を訳した部分で見られる．

7）Morrison の原文に“sympathy”の語は出てくるが、逐語訳になっていないために、「共感」の語が使われていない箇所もある．原書の“the tendency to mischief is increased by the sympathy of others equally vicious with himself.”という表現が、「而モ其勢ノ傾向スル所、終ニ同氣相求メテ、以テ其感ヲ共同シ、」というように、「同気相求める」「その感を共同」という表現で訳されている．

8）『哲学大辞書（1912）』では、「追感（Nacherleben）」の項目の中で、追感と同義の「共感（Miterleben）」として記載されている．この項目では、Karl Groos や Theodor Lipps について言及され、「追感」も「共感」も「感情移入（Einfühlung）」に関連した言葉として説明されている．この項目を執筆した乙骨三郎は東京帝国大学の哲学科出身で、音楽学や美学が専門であり、そうした文脈の中でこの言葉が使われている点に注意する必要があろう．

9）“Miterleben”は『哲学大辞書』で「共感」に対応する語として記載されていたドイツ語であり、「～と共に体験する」の意味である．また、“Mitgefühlen”は、「同情／共感」などと訳される語である．

10）フレーザーの「共感呪術」の概念は、呪術的な作用に対する考えの論拠を説明したものである．敵に似せた像を傷つけることで敵本人に危害が及ぶという「類感呪術（類似の法則）」や、かつて敵と接触していたもの（敵の毛髪や足跡など）を傷つけることで敵本人にも危害が及ぶという「感染呪術（接触の法則）」という呪術の法則をまとめて、フレーザーは「共感呪術（共感の法則：Law of Sympathy）」と呼んでいる．ここでの“sympathy”は、何らかの超自然的な力によって同時に影響を受けたり、お互いに影響を及ぼし合う関係性という意味で使われている．このような超自然的な働きという意味は、1919 年の『A New English Dictionary（Murry et al., 1919）』の“sympathy”の項目の中でも、第一の意味として記されている（1.（real or supposed）affinity between certain things, by virtue of which they are similarly or correspondingly affected by the same influence, affect or influence one another（esp. in some occult way）, or attract of tend towards each other. p.368）．
ロミオとジュリエットの中で使われている“sympathy”の語は、離れているはずの 2 人が同じように嘆き悲しんでいるのを見たジュリエットの乳母が驚いて放つ言葉であるが、そこでは感情の共有という意味と超自然的な一致という意味の両方を含む意味でこの語が使われている例と見なすことができる．

11）『*Client-centered therapy*（Rogers, 1951）』の第 6 章と第 7 章における“sympathy”や“empathy”の語は、カウンセリングや集団療法に参加した参加者の発言の中に出てくるものであり、この時代のアメリカにおいて“empathy”の語が既に非専門家によっても使われていたことがうかがえる．これらの語の使用は、Rogers が専門用語として使っているものではないため、友田は敢えて「感情移入」の語を使わなかった可能性がある．

12）本稿の後半部分では、Rogers の著作での“empathy”や“empathic understanding”という表現に対する訳が、友田不二男、佐治守夫、伊東博によって、どう扱われてきたかに焦点を当てて、文献に基づいて検討しているが、『ロージャズ全集第 18 巻（友田他，1968）』にはこの 3 名を含む座談会の内容が掲載されている．座談会の中で、佐治は「エンパシィというのもわからないね．〈中略〉“あたかも……のごとく”というのはよくわからないな．」と語り、伊東も「わたしはエンパシィというのはいらない気がする」と語るなど、“empathy”の訳語の問題以前に、Rogers によるこの概念の定式化に対して否定的ともとれる見解が表明されており、非常に興味深い．この語をどう訳出するかということは彼らにとってはあまり重要な問題ではなかったのかもしれない．